

## 『ベンヤミンのアレゴリーの思考』

山口裕之著

人文書院 二〇〇三年

ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)というと思い浮かぶのは、ま

はあのクレーの絵『新しい天使』。ベルリンで若い頃に入手・愛蔵して同じタイトルの雑誌の発行を構想し、また、彼の終生の「歴史の天使」のアレゴリー像ともなったものだ。亡命地パリを去る直前に書かれた思想的遺書ともいえるべき『歴史哲学テーゼ』においてもこの絵は言及されていて、さらにこうある、「この歴史の天使は顔を過去に向けている。我々の目には出来事の連鎖が立ち現われてくるところに、彼はひたすら破局だけを見ている」。次が、一九二四年にカプリ島で出会って彼が『一方通行路』を捧げた「ベンヤミンの恋人」で「プレヒトの友人」であったロシア革命の申し子アーシャ・ラツイスだろうか。第三に、プレヒトの亡命地デンマークのスヴェンボルを訪れて、たとえばチェスをしつつカフカについて対話している二人の姿。最後がやはり、一九四〇年パリ陥落でナチスの手を逃れてピレネー山脈を越えようとしたスペイン国境の町ポルト・ボウでの服毒自殺。最大の理解者の死を知ったプレヒトは悲痛な哀悼の詩を捧げている。未完の膨大な断片群『パサーージュ論』が遺された。

プレヒト経由でベンヤミンに出会ったという私の「色眼鏡」のかかったイメージだが、ベンヤミンという思想家はおそらく、読み手にさまざまな像を思い浮かべさせるのだろう。研究史におけるベンヤミン受容も、ハーバマスの言う「諸党派の争い」に巻き込まれて、粉々な像にまで拡散しているのかもしれない。とりわけ、初期のユダヤ神学的・神秘主義的な側面を重視するショーレム派と、後期のマルクス主義的・唯物弁証法的側面を体现するアドルノ派に二分されてきた観があった。

山口裕之氏の二〇〇一年の博士学位取得論文を基にして二〇〇三年に刊行された本書『ベンヤミンのアレゴリーの思考』は、そういった受容史の上に立ちつつ、「初期」および「後期」に顕著な特質を前提しながらも、両者がその展開において「媒介」を見出しているそのあり方に、ベンヤミンの思考の質を見ようとするものである。そのためにとられているのが、作品総体への言及や評伝的レベルを捨象し、『カール・クラウス』(1981)と『ボードレールにおける第二帝政期』(1938)およびそれらに先行する『パロック悲劇の根源』(1925)の三作品だけを中心的にとりあげ、メシア思想と唯物論の結合のトポスをなすともいえるべきベンヤミンの思考における三段階的な展開の枠組みと、そこに構造的に組み込まれている「アレゴリー的な見方」を炙り出す、という方法である。しかも思想形成過程の継起的展開にあえて逆行しつつ、後期の思考圏に属するとされるクラウス論とボードレール論の分析に基づいて年代的にはそれらに先行するドイツ悲劇論を考察し、テクストを丹念に読み返すことで概念連関を再構成しつつ、ベンヤミン思想の「星座的布置」Konstellation」としての内在的な構造型を浮かび上げようとするのだ。そこにあるのは、「ベンヤミンのテクストからの引用が、

これまであまりにもベンヤミンの思考がもつ本来的な構造とかけ離れた仕方ではしばしば行なわれているからでもある」という先行研究への批判であり、ベンヤミンの思想に誠実であろうとすればテキストに密着するしかないという強い意思と確信であろうか。

本書は序について、4章構成になっている。

第1章でまず、仮借ない時代批判を行なった論争家クラウスを論じた『カール・クラウス』が、ベンヤミンの思考モデルとしてとりあげられる。「全人間」「デーモン」「非人間」の三つの章からなるこの著作はベンヤミンの三段階的な思考の枠組みを構造的な完結性において示すものであることが、それらの各段階に見られる顕著な諸概念とともに分析される。同時に、そこにおける直接的にマルクス主義が告知されている転換(シヨールム)がどのような性格のものであるかも明らかにされる。

第2章においては、本来は広大な3部構成の「ボードレール論」の第2部として構想されていた『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』が、精緻なテキスト批判を踏まえて、「クラウス論」のとの並行性という視点から考察される。ことにともに二義性を担った「アレゴリー」概念が「デーモン」の章との対応関係において捉え返され、さらに「ポヘミアン」「遊歩者」「近代」の三つの章に即しつつ、詩人で陰謀家として位置づけられたボードレールの言葉が、古典古代と近代の相互浸透という形で二義性を孕む詩的戦略と一体であったことが提示される。

その上で第3章において、翻つて『ドイツ悲劇の根源』の内的構造が、ここにこの「バロック悲劇論」の最も中心的な概念である「自然史」「アレゴリー」「根源」に焦点をあてつつ、(原初―近代の喪失―救済)

の三段階的な図式の中で、詳細に考察されることになる。いいかえれば、後期の著作を規定する基本的な思考のあり方が、初期の思想のうちにすでにどのように胚胎しているかを再検証する試みとも言えよう。

つまりは第4章で再確認されているように、これら三つの著作に同一類型として繰り返し立ち現れる三段階的な思考の図式(シエーマ)が「アレゴリー的な見方」とベンヤミンが呼んでいる思考のありかたにいかん規定されているかを浮かび上がらせること、かつそのアレゴリー概念をその具体的特性とみなしうる「デーモン」概念の二義性との連関のうちに捉えようとすることが、本書の意図であり、かつ成果でもある。山口氏自身の言をかりればそれは、「星座を星への距離という時間性を捨象した空間的配置のうちに捉えるように、彼の思想の(布置/星座)をもまた、思想が形成されていく過程としての時間的要素を捨象した構造性のうちに最終的には捉え」たい、という思いであろう。

正直言つて決して読みやすくはない。考察の対象となつているのが難解でなるベンヤミンのテキストだということもあるが、本来が博士論文で、それゆえことにドイツでの最新の研究成果を踏まえつつ、専門家を相手に独自のベンヤミン像を構造的な枠組みとして果敢に打ち出そうとした大部の力作であるからでもあろう。評伝や総論の域をこえた、テキスト批判に基づく本格的なベンヤミン研究の地平の到来を実感させられた。同時に本書は、氏自身のアトがきにあるように、「捉え難かったベンヤミンの輪郭を自分のために描き出し、自分自身のベンヤミン研究の基盤にしたい、という私的な動機に支えられたもの」であつたかもしれない。遺稿『パサージュ論』研究への序説で、「アレゴリー

的思考」に基づくメディア論研究への序説でもあり、さらに「文化科学／文化学／文化研究」への関心を加えたその三つの領域は、山口氏にとって殆どひとつの問題圏を構成するという。そのことはまた、本書を基に氏の今後の研究が深度と拡がりにおいて、メディア論や映像論、空間論、時間論、文化論へとさらに展開していき続けるであろうことも、確実に予感させてくれる。

ただ「ベンヤミン研究者」でない私は、これからも勝手に私のベンヤミン像を楽しんでいきたい気がする。空間造形作家ダニー・カラヴァンがベンヤミンの遺作にちなんでつくったという『パサーージュ』を見るためにも、ベンヤミン最期の地ポルト・ボウもいつか訪れてみたい…。

(谷川道子)